

## 2025年度(令和7年度)学校経営方針

町田市立小川小学校  
校長 星 彰

### 0 prologue ~決意~

子どもたちが学校に集うのは、「みんなでハッピーになる」ためだと私は考えている。これは、本校の教育活動を進めるうえで大切にしている行動指針でもある。

では、その「ハッピー」とは何だろう。

私の考えるハッピーとは、「自由の相互承認」——少し難しい言葉だが、「一人ひとりを、自由で対等な存在としてお互いに認め合うこと」である。これは哲学者ヘーゲルの言葉から着想を得たもので、彼は「対等な自由を認め合う社会をつくることこそが、自由に、平和に生きる唯一の方法だ」と語っている。

どんな感性や考えをもっていても、どんな信仰や表現をしていても、それが他の誰かの自由をおびやかさない限り、すべてが「自由」として尊重される社会。そんなあり方を、学校という小さな社会のなかにも育てていきたいと願っている。

学校が、安心して「自分」を出せる場所であり、子どもたち一人ひとりが、明るく、自分らしく、のびのびと、その存在感を輝かせている——。そんな学校を目指している。

このような考え方を土台に、「こども基本法」にある「意見を表明する権利」や、「町田市子どもにやさしいまち条例(コドマチ条例)[2023年12月制定・2024年5月5日施行]」を尊重した学校経営を進めていく。

昨年度、本校は開校50周年を迎えた。マスコットキャラクター「オガワラビー」の誕生、放置されていたビオトープの再生、小川の町を彩る「校門ART」の制作、記念式典では教職員・保護者・地域の皆様による合同バンドの演奏など、たくさんの取組を通して、子どもたち・教職員・保護者・地域が、これまで以上につながり合う1年となった。まさに、半世紀の節目を飾るにふさわしい時間だった。

そして今年度は、いよいよ開校51年目。これから先の50年、すなわち100周年への歩みが始まる。「伝統は守るものではなく、創るもの」。この思いをあらためて胸に刻みながら、今年は「子どもたちの自治」をさらに深め、「地域とともにある学校」として、保護者や地域の皆様と「共創」する教育活動に力を入れていく。

そして何より「みんなで、ハッピーになる！」——この願いを、みんなで一緒に、かたちにしていきたい。

#### 教育目標

○よく考える子ども

○思いやりのある子ども

○健康な子ども

### 1 Inclusive ~「みんなでハッピーになる」の具現に向けて~

#### (1)子どもたちの「自治」

年度初めに、校長から子どもたちに「『自治』を進めてほしい」と伝え、「ここは、皆さんの自治体、つまり『小川っ子のまち』です」と、本校を一つの模擬都市になぞらえ、学校生活を送っていくことを宣言した。学校生活をまちづくりに例えることで、子どもたちが「よりよいまちにするためにはどうしていけばいいか」「そのために必要なことは何か」を主体的に考え、実現していく過程が生まれる。その中で、学校という小さな社会をよりよくしようとする主体性や創意工夫、そして「社会は自分たちで変えていける」という自己有用感や自信が育まれ、子どもたちの「自治」が促されると考える。

この考えに基づき、教員が毎月・毎週の生活目標を一方向的に提示することはやめた。「みんなで、ハッピーになる！」という本校の行動指針に照らし、子どもたち自身が課題を見出し、解決に向けて動いていくことを大切にしているからである。

また、委員会活動においても、自治の在り方を見直した。たとえば、保健委員会による石けん補充のような定型的な作業は、各学年の当番活動に移し、委員会活動からルーティンワークを排除した。その上で、委員会は、学校生活における課題を自ら発見し、その解決に向けてアイデアを出し合い、自治的に取り組む場とした。

年度末(2~3月)には、「ミニ・ミュンヘン」の取組に示唆を得た「まちのお祭り」を、子どもたちが

計画する。自分たちがよりよいまちづくりを目指して共に高め合ってきたことを振り返り、喜び合う場とし、さらなる「ハッピー」への飛躍の機会としていく。

## (2) もう一つの居場所「Home」

一般的に、学校における自分の居場所は「〇年〇組」という学級一つであることが多い。しかし、人は集団の構成メンバーによって発揮される力が異なる。だからこそ、学級以外にも多くのコミュニティをもち、多様な自分の可能性に気付いてほしいと願う。

そこで、本校では縦割り班活動のさらなる充実を図る。子どもたちがより深い所属感をもてるよう、縦割り班の名称を「Home(家族)」とした。子どもたちには、「これから縦割り班を、『小川っ子のまち』の『家族』という意味で“Home”と呼ぶことにします。Home は、皆さんにとってのもう一つの居場所です」と伝えた。

異学年で構成された Home で過ごすことにより、「学年」という同質性から解放され、「比較」から自由になるとともに、「異質」な存在と共に生きることが可能となる。この在り方は、哲学者ハンナ・アーレントの言う「公共性」の考えにも通じる。

Home 活動では、次の4点を大切にしていく。

- 年齢や性別を超えて、みんなで創っていくこと。
- 自分にとってよいことが、相手にとってもよいことかを話し合っ決めていくこと。
- 自分と、自分以外のすべての人のことを考えること。
- 約束は、よりよいものに向けて新しくしていけること。

これにより、「みんな一緒に居心地がよい」から「みんな違うけれどハッピーはつくれる」への価値観の転換を図る。

教員に対しても、「もう一つの自分のクラス」という気持ちで Home に関わり、児童理解を深めてほしいと伝えている。従来の縦割り班活動では、高学年が「下級生を楽しませなくては」「最高学年として我慢しなくては」といった義務感に縛られがちであった。そういった「学年」ではなく「個人」を基準とした役割分担、低・中学年の児童も周道的でない参加のあり方を模索してほしい。高学年に対しては、「低学年も、高学年であるあなた自身も、みんなでハッピーになれる場にしていこう」と促す。

Home を主体とした取組として、全校ミーティング、掃除、全校遠足(こどもの国)、Ogawa Sports Fes.(運動会)、まちのお祭り、時には給食や授業なども予定している。また、Home の名称を子どもたち自身で考案し、教室に表札を設置するなどして、愛着を育てていく。

## 2 Autonomous ～自律した学び手を育む～

### (1) 自らの意思で、目標や学び方、学習進度を考え、自らの責任のもとで学習を遂行する力を育む。

町田市教育委員会では、「学び続ける力の育成」、そのための授業“改革”を最重要課題と位置付けている。

その課題解決に迫るために、本校では、自己を振り返り、軌道修正をしながら自らの目標に向かって学び続ける「自己調整力」の育成を重点とする。

児童の学びの姿に対して、「知識技能の習得」に着目する以上に、「自己調整力」の変容に焦点化し、価値付け・意味付けを行うことにより、自律した学び手を育む。

その際、重要となるのは、児童が「自分はどれくらい努力すれば成長できるのか」をつかんでおくことである。

そのために、まずは児童に次のように話し、努力の照準を具体的に定められるようにしたい。

- 「85点の課題」に臨むことが、「背伸び空間」に踏み出すこと

某研究において、「テストで 85 点をとれるレベルの課題が最も学習効果が高い」と言われている。

自分で学習を進める時に、100点を容易に取れる問題を解いても、すべて分かり切っていることをなぞっているだけなのだから、安心はできるかもしれないが、成長はない。これは「快適空間」に留まっている状態と言える。

一方、60点しか取れない問題を解いていても、あまりに難しすぎて考える気にもなれず、やはり成長は少ない。これは「混乱空間」にいる状態と言える。

自分にとって、85点をとれるくらいの難しさに挑戦することが、自分を最も高めてくれる。

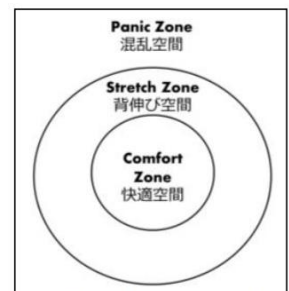


図 「学びとリスク」の関係  
Brown(2008)等を参考に筆者作成

「85点の課題」に臨むこと、つまり、「背伸び空間」に踏み出そうとすることが、自分を成長させてくれる一番の近道である。

次に、具体的な手だてとして、日常的に次の2点に取り組む。

○漢字テストの主たる目的を、「『私はどうやったらものを覚えられるようになるのか?』を明らかにするため」とする。年度当初、こどもたちには、テストでよい点を取ることも、自分のじっくりくる学習方法を見出す「じぶん研究」を進めることの方を大切にしよう伝えた。

○算数の授業45分をAARサイクルで構成する。Anticipation(見通し)5分→Action(行動)30分→Reflection(振り返り)10分といった構成を考えて、Actionのフェーズは、できる限り児童に委ねる。そのために有効な手だてとして、Web上のICT教材eboardをフル活用する。児童は、eboardにある動画で学習を自律的に進める。教員は、児童の学習の様子や振り返りから、つまづきを見取り、必要な手だてを講じる。

これらの日常的な実践を踏まえて、以下に示す校内研究を推進することで、児童の「自己調整力」を飛躍的に高めることを目指す。

○「複数教科単元内自由進度学習」を全学年、年間2～3回実施する。併せて、自主公開(他校の教員を対象とした授業公開および研究協議会)を年間3回実施し、実践を磨き上げる。

## (2) テキストプログラミングなど、ICTを活用した学びを充実させるとともに、情報モラルを育む。

テキストプログラミングの学習単元「コンピュータとおしゃべりしよう」を全学年に新設した。本学習により、自らの考えを試し、振り返り、修正していく過程を重ねることで、自己調整力を高める。

町田市の提供するMNEポータルサイト、Qubena、学習者用デジタル教科書を十分に活用する。

Canva、padlet、kahoot!等の教育アプリに、教師も児童も習熟し、chromebookを、「知識・技能の習得のためのツール」から、「協働的な学び、対話的な学びを実現するためのツール」として活用できるようにする。

そのために、「キーボー島アドベンチャー」の取組を推進し、全学年でタイピングの基礎基本を身に付け、chromebookを「考える道具」として使いこなせるようにする。

また、保護者と連携したり、様々な機関と協力しながら、情報モラルの向上を図る。

## (3) 個別最適な学びを充実させる。

「支援が必要な子」と「支援が不要な子」という区別はない。すべての児童が、それぞれの場面で、必要な支えを受けながら学んでいく存在である。一人ひとりの個性やその時々ニーズに寄り添いながら、誰もが安心して学べる環境づくりを進める。

○年度当初の全校ミーティングにて、「平等と公平」について児童に伝え、合理的配慮を「ずるい」と捉えるのではなく、同じスタートラインに立つために必要なことと捉えられるようにする。

○不登校の児童のための「ひみつのたまり場(仮称)」を校内に設置する。週に1～2回、空き教室を活用し、地域の高齢者と児童が半日から1日を共に過ごす居場所である。教室に通うことだけを学びとせず、安心できる場所で人とつながる経験は、学びの多様性を支え、生きる力を育む土台となる。地域とともに、子どもたちの学びの選択肢を広げていく。

○「第3期 町田市特別支援教育推進計画」に基づき、一人ひとりの特性に応じた特別支援教育を推進する。特に、特別支援教育コーディネーターを核として、学級とサポートルームとの連携をより一層強化する。「サポートルームでの学びが、学級に戻り『集団の中の個』となると十分に発揮できない」という課題を解決するべく、次の方策を講じる。

・適応指導において、1時間じっくり見取る時間を確保する。また、個別指導の時間を学級で過ごす機会を設けることで、「集団の中の個」における成果と課題を明確にする。

・サポートルームの教員が各教室で児童とともに給食を食べたり掃除をしたりすることで、担当児童をより深く見取るとともに、学級担任に専門的知見を共有する。

○スクールカウンセラーによる心理の専門的知見を活かし、児童の困り感を軽減、改善するための適切な指導及び必要な支援を行う。

○特別支援教育アドバイザーによる研修訪問により、組織を挙げて特別支援教育の専門性を高める。

○日本語指導を必要とする児童には、「ポケットク」等の翻訳ツールを導入・活用し、児童の学習支援、保護者との円滑な連携を図る。

○学校生活においては、施設の表示をはじめ、誰もが分かりやすいデザインを施していく。ただし、教職員がそれらを進めてしまうのではなく、「小川っ子のまち」の主役である児童が、それらに



課題意識をもち、進めていけるように導きたい。

○本校から発信する資料は全てUDフォントとする。

○ゲストティーチャーを招聘し、吃音・起立性調節障害・小児がん・化学物質過敏症や、子どもホスピス等、こどもを取り巻く現代的な課題について、こどもたちの理解を促進する。

#### (4)生涯を通じて、心も体も健康で、活力ある生活を営むための力(アクティブに生きる力)を育む。

体育の授業においては、AI スマートコーチを活用し、「動画で学ぶ・撮って比較する・記録する」活動を通して、児童が自らの動きを客観的に見つめ、改善点を考え、主体的に技術の向上を図る力を育てる。こうしたプロセスの中で、自分の目標や課題に向き合い、学びを調整していく「自己調整力」の育成を目指す。

Home を基盤とした Ogawa Sports Fes.(運動会)を、「アクティブに生きる力」を育むための中核となるような取組にする。

町田市「朝食レシコンテスト」への積極的な参加等、食育をはじめとする健康教育を推進する。

#### (5)その他の重点課題についての解決策

- ・「読書」・・・図書委員会を中心に、児童の発想を生かした新たな取組で、読書に親しむ習慣を育む。保護者ボランティアによる「おやこ文庫」の取組とも連携を図る。学校図書館の3つの機能(読書センター/学習センター/情報センター)を十分に発揮できる環境整備を進める。
- ・「英語」・・・年間3回(7月、12月、2月)には、他国の小学生とのオンライン交流を実施する。その交流を目掛けて日々の授業を構成することで、英語で話したいという意欲を高める。
- ・「安全」・・・交通安全の意識を高めるための、継続的で粘り強い指導を工夫する。避難訓練(命を守る訓練)について、「予告なし訓練」を増やす等、より実践的な訓練の在り方の検討を進める。
- ・「環境」・・・「湿地型ビオトープの再生」や「シジュウカラを守る巣箱設置」といった昨年度の取組を継承しつつ、「ヤゴ救出大作戦」などの新たな活動にも地域の協力者とともに挑戦する。身近な自然環境を守り育てる体験を通して、児童が持続可能な社会の在り方を考え、行動する力を養う。

【上記の取組を通して改善する課題(数値は2024年度学校評価A評価の割合)】  
宿題・家庭学習への取組 26% 読書への取組 18% 英語学習への取組 27%  
きまりの意識 25% あいさつ 25% ネットマナー 11% 運動・スポーツ 39%  
安全意識 25% ICTの活用 45% 食習慣・生活習慣 19%

## 3 Innovator ~イノベーターとしての教師~

本校の教職員は、「児童の意見を、一人の人間として対等に受け止めること」を基本姿勢とする。それは、教職員が児童の意見に迎合することを意味しない。児童と教職員で意見が異なる場合は、対話をあきらめない。教職員と対等に、児童が、よりよい学校にしていくための提案をしていけるようにする。

また、年度当初の会議にて、「体罰、わいせつ行為等の処分の対象にはなっていないために、黙認・看過されてきたかかわり方(教室マルトリートメント)」について教職員に指導した。例えば、「早くやらないと～させないよ」と脅して動かそうとする言葉や、「そんな子は1年生からやり直しなさい」と、下の世代・年代の人と比較するような言葉である。

そのような「毒語」による児童への関わりは、「教員はこどもたちの行動をコントロールできる存在である」という思いから生じるものであり、払拭せねばならないこと、それよりも、自身の指導の見直しや授業改善の方向へエネルギーを向けることを、教職員に日頃から指導する。

#### (1)目指す教師像

一言で十分に表現することが難しいため、次に箇条書きで示した教師像の総体を、本校における「目指す教師像」とする。

- ・進取の気性に富んだ教師
  - ・確かな時代認識の下、今のこどもが活躍する20年先の未来につながる学びを創ろうとする教師
  - ・こどもに、「関心・感動・感謝」のできる教師
  - ・こどもの姿を、価値判断せず、ありのまま共感して分かろうとする教師
  - ・「教える専門家」から「ともに育つ専門家」になろうとする教師
- ※「教師が知っている・できることをこどもに教え分らせるのが授業」というのではなく、

「同じ対象をこどもと共に追究し、学びのが授業」・「授業とは教師とこどもによる創造の過程である」という授業観をもった教師

- ・哲学者ヘルバルトの言う「出会いの音階」を即座に調整できる教師
- ・教師の語りかける言葉の重みを自覚し、こどもが伸びていける温かい言葉かけができる教師
- ・一部の児童だけで授業を進めることに、胸の痛みを感じられる教師
- ・誰一人見捨てず、一人残らず全員で育ち合うことに挑む教師

(2)「チーム担任制」により、複数の教師で、一人ひとりの児童のよさを見出し共有する。

「チーム担任制」とは、学級担任を一人に固定せず、複数の教員がチームとなり、担任業務をローテーションして運営することと定義する。授業についても、学級を固定して指導する教科もあるが、一部教科担任をしたり、合同授業にしたりして、チームで学年全員の児童を育む。

具体的には、次の通り運用する。

- ・1週間ごとに担任業務を交代で行う。※担任業務とは主に朝の会、給食・掃除、帰りの会等を指す。
- ・授業は一部教科担任制とする。

どの教科を一部担任制とするかは、学年の状況によるが、例えば2学級の場合、1名の教員が2学級分の社会の授業を行い、もう1名が2学級分の理科の授業を行う、というようにする。

(3)OJT を計画的に実施し、日々の授業改革を図る。

自己申告の機会等を活用し、全員、年3回以上の校内教員対象の授業公開を実施する。その際、町田市教育委員会「授業をデザインする8つの取組」と「6つの選択」の視点に基づいた授業改革を図る。

(4)「いじめを防ぐ・いじめに気付く・いじめから守る」ことのできる教職員組織を確立する。

「学校いじめ防止年間計画」に基づき、例えば、次のような取組を確実に実施する。

- ・「いじめ防止対策推進法」の児童への周知
- ・町田市提供 いじめ匿名連絡サイト「スクールサイン」の全児童への周知
- ・年3回のいじめ防止に関する授業
- ・こども自身が主体的に考え発信するいじめ防止の取組
- ・いじめが起こりにくい開かれた学校環境及び清潔、快適で美しい環境の整備

「学校いじめ対応チーム」定例会を週1回実施するとともに、必要な時には躊躇せず臨時会を開催し、教職員組織でいじめの根絶に挑む。

「いじめは必ず起こる」という意識をもち、その片鱗を見逃さずに組織を挙げて対応を進め、「いじめの重大事態ゼロ」、「いじめの未解決ゼロ」を完遂する。

【上記の取組を通して改善する課題(数値は2024年度学校評価A評価の割合)】

いじめ・人権感覚 31% 校内整備・校内美化 39%

## 4 Locality ～地域とともにある学校～

### (1)学校づくりの一員としての保護者

昨年度の開校50周年をめぐる取組が成功したのは、紛れもなく保護者の力があつたからこそである。昨年度は、学校づくりには保護者が不可欠であることを再認識する1年であった。そこで、今まで以上に、学校づくりの一員として保護者と連携協力を図り、学校経営を進めたい。具体的には次の2つに取り組む。

○ほっしーカフェ(校長との懇談会)

2か月に1回程度、指定した日時に保護者に集ってもらい、校長と意見交流を行う。話題も決めず、事前の来校予約も無しで、保護者であれば誰でも参加可能とする。昨年度も試行的に3回実施し、そこで話し合われたことをきっかけに学校改善を図ったことも多くある。できる限り学校への敷居を低くし、ざっくばらんに校長と話し合うことで、学校生活における不安を解消したり、学校がよりよくなるための提案をしてもらえるような場とする。

○Learning Crew

学校からのお願い事を tetoru で配信・募集し、それにボランティアで協力してくれる保護者をこのように呼ぶこととした。こどもたちの「学びの乗組員」という意味をもたせている。例えば、体力テストの計測や記録補助、全校遠足での道路横断見守り、さらには、掲示物の貼り換え作業、図工や家庭科の授業準備など、より日常的な支援も依頼したいと考えている。毎日のよ

うに保護者が来校し、教職員の支援をしながら我が子の様子を見たり、教員らと話したりできるような開かれた学校づくりにつなげたい。

## (2)「学校運営協議会」や「保護者と教職員の会」と連携した学校経営

コミュニティスクールとして、学校管理職は、年4回の学校運営協議会(学運協)を生かしたPDCA サイクルを回し、学校経営上の問題点の特定や改善策の検討を図る。加えて、学運協委員と児童とが対話する機会を設け、こどもの「自治」の意識をより一層高めたい。

教職員は、保護者と教職員の会(保護教)や地域の方々をはじめ、関係機関との日常的な連携を通してOODAループを回し、各教育活動の改善をスピード感をもって推進する。

なお、これらの改善を推進するために、ホームページの更新等、日々の情報発信を工夫し、本校の取組を保護者・地域に積極的に伝えていく。

## (3)地域から学ぶ、地域で学ぶ

地域を「学校」「学習材」と捉え、キャリア教育との関連も視野に入れながら、多くの人と関わり、多様な価値観との出会いを栄養にする「人を浴びる」教育を展開する。

具体的には、次のような方々との連携を進める。

- ・地域にお住まいの方々、企業、団体(通学時の旗振り、田んぼ学習、ひみつのたまり場など)
- ・保護者と教職員の会(安全パトロールなど)、保護者(ほっしーカフェ、Learning Crew など)
- ・近隣の幼稚園・保育園、近隣の小・中学校、小川高校、都立町田の丘学園、玉川大学(吹奏楽団)
- ・放課後子ども教室(まちとも)、学童、子どもセンターばあん
- ・町田警察署、町田市子ども家庭支援センター

なお、災害時の地域との連携協力体制についても、地域と学校、相互に確認を行う。

## (4)学校と地域との「結び目」となる空間づくり(検討中)

具体的には、校庭の隅にある、数年来使われていない飼育小屋の周辺に、人が集まるスペースを新設したい。腹案はあるが、実現の見通しが具体的に見えてきたら、改めて明示したい。児童とも対話しながら、当該空間の設計を進め、保護者や地域の方々の力を借りながら、皆で創り上げたい。

【上記の取組を通して改善する課題(数値は2024年度学校評価A評価の割合)】  
地域人材の活用 35% 地域・学校の一体化 41% 情報発信 60% 他校連携 18%

# 5 Sustainability ~サステナブルな働き方~

## (1)「教員の働き方」から捉えた「チーム担任制」の推進

※以下は私の経験則から抱いた課題意識であり、あくまで学級担任制の一側面であることを予め確認しておく。

従来の学級担任制は、往々にして「自分の学級の一切に責任をもつべき」という意識を生む。それは、学級独自のルールを生んだり、隣の学級にかかわることを「越権行為」に感じてしまったり、場合によっては、他の教員からどう見られるかを基準に、学習規律を過度に求めてしまう事態も生じることがある。学級担任の業務は、ワンオペレーション&マルチタスクであり、それに上記の意識が加わることによって、教員の孤立化が進んでしまう。

「チーム担任制」は、学級担任1人に責任を負わせない。「隣のクラス」という“垣根”をなくし、複数の教員で一人一人の児童を見るシステムである。

## (2)2期制により、こどもとじっくり向き合う時間を確保する。

今年度、3学期制から2期制へと変更した。教員が児童一人ひとりとじっくり向き合う時間を確保するためである。長期にわたり「学び続ける力」を育むことができ、より丁寧な学習評価が可能となる。また、学校行事を柔軟に配置できるため、児童も教員もゆとりをもち、児童とのより深い関わりを実現しながら、教育活動を展開できると考えている。

## (3)先生＝「先ず生き生き」を実現する。

年度当初の保護者会にて、教職員の勤務時間について明示し、平常時は、勤務時間に合わせた留守番電話の設定について依頼をした。同時に「教職員の悪口をこどもの前で言わないでほしい。たとえこどもが言ってきたとしても一緒になって言わないでほしい。」と依頼するとともに、「すぐに学校に教えてほしい。学校で必ず解決につなげる。」とも約束をした。

また、先述の「Learning Crew」も、教員が生き生きと働くことにつながるものと期待している。

教員の教材研究の時間を十分に確保するとともに、こどもとの信頼関係を着実に築き上げるために、保護者と協力し、先生＝「先ず生き生き」を実現し、一人も欠けることなく、年度末を迎える。